

審査の結果の要旨

氏名 成松 美枝

学校選択制は、現代における教育改革の方策の一つとして国内外で強い関心を持たれているが、その分、親・子どもの教育の「自由」と教育の「公共性」を巡る多くの争点を孕み研究や政策の上で激しい議論を生起させている。本論文は、米国都市学区（ウイスコンシン州ミルウォーキー市）における学校選択制の展開過程と実際を調査研究し、その特徴や問題、課題を明らかにすることを通して米国都市学区の学校選択制への評価を試みている。

序章では、学校選択制を巡る改革動向や論議、先行研究の総括を通じて課題、方法が設定されている。1章では、学校選択制が導入される前の当市の公立学校制度と問題状況が整理されている。2章では、人種統合を目的に1976年に導入された最初の学校選択の取り組みである。「マグネットスクール」と「チャプター220」の導入と展開過程が整理されると共に、「マグネットスクール」である2つの小学校の運営事例の調査を通じて「基準」に基づく事後評価としてのアカウンタビリティのしくみが明らかにされている。3章では、人種統合を目的とした1970年代後半から1980年代の学校選択制が、マイノリティの生徒達の遠距離バス通学等の多大な負担を強いてきただけでなく、彼らの学力向上も実現できなかったとの批判等から、学校選択制の新たな取り組みとして進められたヴァウチャー、チャータースクール、オープンエンロールメントの導入と展開過程、その問題が明らかにされている。この章でも、ヴァウチャー参加校の一つの宗教系私立高校とチャータースクールの3つの学校の運営事例調査から、この制度下における学校経営の実際とアカウンタビリティのしくみが析出されている。4章では、当市において約四半世紀の期間にわたって展開されてきた学校選択制を学区全体の「学力向上」や「学校経営改善」という観点から総括している。そして、5章及び終章において、学校選択制の「見直し」の中から2000年度に始まった「近隣学校計画」が検討され、最後に評価と課題が整理されている。「近隣学校計画」は、「取り残された生徒層」の学力向上の目的も含め、地域の学校が学童保育や保健医療プログラム等の「福祉的施策」に取り組み近隣地域の子育て事業の拠点となるとともに、地域のニーズに応える学校経営を可能にするためにチャータースクールが保有するような学校の自律性を拡充するものであり、都市学区における公立学校の新しい姿、役割をこの「近隣学校計画」が明示していると結論づけている。

従来、米国の学校選択制については、日本でも理論的・思想的な紹介や検討が多くなされてきたが、本論文のように都市学区全体を対象にし、しかも、多くの学校における事例調査を踏まえた詳細な実証的研究は少ない。本論文は、以上のように、ミルウォーキー市という一米国都市学区における学校選択制の四半世紀にわたる展開過程を明らかにし、その問題と今日的課題を整理した点で意義があり、今後の教育研究に大きな貢献をなすものと評価できる。このような観点から、博士(教育学)の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。